



巻 頭 言

喫煙者の人権

財団法人 日本植物調節剤研究協会 監事
北興化学工業株式会社 常務取締役

木下 傳

人権などと大袈裟に言いたくはないが、今日の喫煙者に対する社会のあしらい方には腹に据えかねるものがある。ヨーロッパ出張の直前に本稿の依頼を受けて、まったくの非科学的人間が純正科学誌「植調」の巻頭言など畏れ多いことではないかと自問しつつ旅立ったが、喫煙者の悲哀をイヤというほど味わう結果となり、思い立ってその憤怒と嘆きを試筆する次第となった。

覚悟はしていたが、成田からヨーロッパまで空港待ちを入れて14～5時間のタバコ禁制飛行は、ヘビースモーカーにとって地獄である。予め主治医よりニコチンガムをもらい自衛したつもりではあったが、喫煙の文字が示す通り、タバコは鼻喉に煙を往復させることによって味わうものであり、ビールのようにノドごしの感覚だけでは決して味わい得ないものであることを知った。やはり乗客の我慢にも限界があるようで、ときどきスチュワーデスが、“ただ今トイレの中でタバコを吸われた方がいらっしゃいますが、絶対にタバコは吸わないで下さい”と警告アナウンスしてくる。にこやかなスチュワーデスの仮面が突如暗転して「安達ヶ原の鬼女」となる。もはや禁煙飛行は人間平等の沙汰の限りではなく、まるで魔女狩りの如く、喫煙者に対する人権の配慮のカケラも無い。

史実であるか否か定かでないが、タバコは梅毒と共にコロンブスがアメリカ土人より西欧文明に持ち帰った土産との説がある。ものの本によれば、タバコは、やがて男性の確たる社会性を示す栄光の葉 (glories of the leaf) となり、男の権威と尊厳と人格を証明する永遠の象徴 (the eternal attributes) として現代に至るまで厳然と存在してきたのである。因みに、

英国の宰相チャーチルは葉巻の愛煙家としても格別であったが、英国議会図書館の記録によれば、キューバで葉巻の味を覚えた22歳頃より生涯喫煙本数を計算してみると、葉巻10本/日、3,000本/年としてその喫煙本数は凡そ25万本にまでなる。チャーチルは91歳で天寿を終えたが、それは今からわずか35年前の1965年のことである。また、1963年、ケネディ大統領はソ連侵攻阻止のキューバ封鎖作戦指令書にサインする前に、サリンジャー報道秘書官に命じて急遽1,100本のキューバ葉巻を掻き集めさせたという逸話がある。同年、ケネディ大統領はテキサス州ダラスで暗殺されたが、アメリカにとって最大の悲劇であった。

喫煙者であれ、非喫煙者であれ、人の死に行く道は同じである。いつの頃から、誰が言い始めたか、今や禁煙運動は減農薬、有機農業などと同次元的に蔓延している。ヨーロッパを旅してみると、北部国ほど厳しく、南部地中海に近づくにつれて段々開放的になる。ギリシャなどは、さすがソクラテス、プラトンの国だけあって価値観は普遍的で、禁煙運動などアングロサクソンとゲルマンの陰謀ではないかと言う。確かに身近なところでは、過酷な対応を要求する農薬再登録問題 (EU re-registration) や、GLP, IPM, GMO問題など、そのEU (欧州連合) 政策の深層に潜むものの本性は、際限なく巨大化する欧米商業資本主義そのものではないかと考えられなくもないが、考え過ぎだろうか。

二十一世紀農業の行く末は、いずれ墓石の下から覗くことになるが、戦後の混迷と飢餓時代を再び見ることは願い下げにしたい。